

中国のプロ野球リーグC B Lに関する研究

トップスポーツマネジメントコース

5013A301-8 李 彤楓

研究指導教員：平田 竹男 教授

I. 序論

野球が中国に伝来したのは19世紀末のこととされている。清朝滅亡後、「中国革命の父」孫文により、野球は集団行動の訓練などに有効だと重視され、植民地であった上海で開かれる万国野球リーグ戦の開催や、その後戦時中に、国共両軍により軍事訓練に利用されることなどを通じて、20世紀前半において野球の普及は中国において着々と進んだ。新中国成立後も、野球は軍事訓練のための有効手段と捉えられ、賀龍将軍によって北京軍区、四川軍区に野球チームを結成させ、1953年の第1回全国運動会には30チーム以上が参加した。しかし、1960年代に文化大革命が勃興したことにより、文化・スポーツ事業が弾圧を受け、野球は中国大陆から姿を消した。1979年には主要な省、都市では相次いで野球協会が設立され、チームは再結成されたが、文化大革命の期間は「野球経験世代の喪失」を生んだため、野球は中国において元の勢いを取り戻すことはできなかった。

2002年に、五輪の招致成功とWTOへの加入が発足の決め手であるとされて、サッカー、バスケットボール、バレーボールに続き、中国において4つ目のプロスポーツリーグ「中国棒球聯賽」(C B L)が発足された。

五輪後外資スポンサーが撤退し、経営難に強いられた末、2012、2013シーズンリーグ中止となったが、その2年後の今年、集客を実現した興行ビジネスの姿で蘇ってきた。

確かに、大学チームや社会人草野球チームの数を見れば、民間での普及は進んでいる兆しは見えてくるが、中国の各級体育局に新規登録した将来プロリーグの候補選手になりうるアスリートの人数で見ると、中国において「プロ野球選手」である魅力はサッカーやバスケットにはまだ比べられない、プロスポーツとしての野球はまだ発展途上ではある。

将来性が見込められなかった中、自国資本に切り替えて再スタートしたC B Lだが、決して普及度が高いとはいえない国内において、集客を図るプロスポーツ興行ビジネスとして継続的に発展していくために、海外のプロリーグに目を向け、世界的に見ればC B Lはそれらのプロリーグとはどのような相違があるのか、学ぶところはどこにあるのかを探求していく必要性があると考え、本研究を計画した。

II. 目的

本研究の目的は世界各国のプロ野球リーグビジネスを俯瞰するとともにC B Lとの経営要素における差異を明らかにすることである。

III. 研究手法

世界各国のプロ野球リーグと比較し、分析する。調査対象は中国C B Lを始め、ドミニカンリーグ、ベネズエラリーグ、メキシカンリーグ、メキシコ冬季、パナマ、コロンビアン、ニカラグアン、日本NPB、日本BC、韓国KBO、台湾CPBL、イタリアIBL、オーストラリアABL、イスラエルIBLに絞る。

調査項目として、1、各国のプロ野球組織の変遷およびMLBとの関係について調査し比較。対象リーグが所在する国々において、プロ野球組織の発足、改組、中止などを時系列で洗い出し、並びに各節目においてMLB資本の関与の有無、または1970年代海外で設立されるMLB資本の野球アカデミーの設置の有無を調査。2、各リーグの興行ビジネスとしての成り立ちについて調査し比較。以下の項目を設けていく。2014年シーズンのデータの元、チーム数、総試合数、平均観客動員数、中間ランクのチケット代を調査し、掛け算で興行売り上げ

規模を試算する。また、選手賃金も合わせて調査する。3、各リーグのレギュレーションについて調査。開幕開催時期、アメリカシーズンとの重なり、外国人選手と海外への選手輸出。4、類似対象リーグとの事例比較。

そして、情報やデータの収集は主に以下の方法で行った。

- 各リーグのホームページ
- アメリカ野球データベース
Baseballreference.com 及び
Lahman.com
- baseballdeworld.com by Journeyman Media
- NPO法人「Baseballbridge」代表田中氏へのインタビュー。
- 調査対象リーグ所在国でプレーする選手への取材。

IV. 結果

1、比較対象リーグの組織された歴史を辿って見た結果、ドミニカ、ベネズエラ、メキシコなど、独立運営でMLBの開催期間と重なる夏季リーグとしてスタートしながら、第2次世界大戦後しばらくの間に、資本を受けることや業務提携契約などでMLB機構に収まり、冬季リーグ化され、MLB機構のファームリーグと化した図式が見て取れる。また、2000年代に入ってから、MLBの投資を受けて発足したのはイタリアIBL、オーストラリアABL、イスラエルIBLであり、中国CBLと同じくMLBの投資を直接要せずに発足したのは国内にトッププロリーグがすでに存在する日本のBCリーグ、それに過去に野球がプロ化された歴史がある中南米2リーグであることが分かった。

また、それぞれの一人当たりGDPに対する興行規模が比較的に小さいと言うのは上述した2000年以降発足した7リーグの共通点であり、さらにその中、各リーグの選手の平均賃金水準がその国の平均月収を下回るのは中国CBLと日本BCリーグ、イタリアIBL、オーストラリアABL、イスラエルIBLであることが分かった。ただ、これらのCBLに類似するリーグとは違い、海外からの選手がおらず、海外に選手を送り出していないところが特徴とも言える。

2、CBLと類似性を持つリーグであるカリブ海2リーグ、イタリアIBL、日本BCリーグとの事例比較を通じて、カリブ海2リーグでは地域国際大会への参加及び統合、イタリアIBLでは現地MLBアカデミーとの連携、そして新球場の利用、BCリーグではプレーオフの

設計、新球場の起用そして地域密着策と言った面において、CBLより優れていることが分かった。

V. 考察

1、消費者を抱える国内完結型プロスポーツ興行であることはCBLの特徴とも言える。MLBは戦後自由貿易の実現、そしてグローバル経済拡大を機に国内完結型の社会的分業構造から、中南米、さらに欧州、オセアニア、中国を範囲とした社会的分業構造へとシフトした。選手育成装置であるアカデミーを設置し、またリーグ組織に直接投資することで現地のプロリーグはもはや米国外での「マイナーリーグ」と化している時代の流れの下、CBLとしては人的資源である選手はすべて「国内生産」であり、球団も各省、市が所有し、運営を任せる機構も国内スポーツマーケティング会社であるグローバル経済が極端に進展し、海外からの輸入や資本の進出が相対的に自由になった状況下での、後進国の自立・国内完結発展の帰結と見る事が出来る。

2、市場経済成長の著しい中国においては国民の労働収入は右肩上がり、今後も消費能力を増していく。CBLのターゲット市場として多大な可能性を秘めている中、トリプルミッションにおける「勝利」と「普及」からアプローチをし、同地区チーム同士間の試合数を増加することやプレーオフ設計の改善、リーグの器にあった地域国際大会への参加及び統合、MLBアカデミーとの連携、新球場を起用、それに地道な地域密着普及策などをCBLに提言する。

VI. 結論

本研究では、中南米7リーグ、アジア5リーグ、オセアニア1リーグ、ヨーロッパ1リーグ、中東1リーグを中国CBLの比較対象とし、各国プロ野球リーグの組織変遷及びMLBとの関連性、各国プロ野球リーグの興行売り上げ規模試算及び選手の賃金水準及び各国プロ野球リーグのレギュレーションなど三つの角度で比較し、相違点を浮き彫りにした上、さらに類似性を持つ他リーグとの比較を通じて、プレーオフの設計、地域国際大会への参加と統合、現地MLBアカデミーとの連携、そして新球場の利用と言った面に関して、CBLとしては類似リーグに模倣し、現状を改善していく余地があると結論づけた。